

# ぼやあ樹だより

今月も、空き情報やキャンペーンなどを掲載した広報誌「ぼやあ樹だより」をお届けいたします。また、弊社ホームページでは各事業所のニュースなども掲載しておりますので、ぜひ一読いただけますと幸いです。

## 空き情報

### 小規模多機能型居宅介護ぼやあ樹 空き情報(2026年6月1日現在)

ぼやあ樹の6事業所(新子安・神大寺・平川町・松本町・江ヶ崎町・関内)の空き情報をお知らせ致します。ご利用をご検討の際に、参考にしていただければと思います。

地域	事業所名	泊まり	通い	訪問
神奈川区	ぼやあ樹 新子安	◎	◎	◎
	ぼやあ樹 神大寺	◎	◎	◎
	ぼやあ樹 平川町	◎	◎	◎
	ぼやあ樹 松本町	△	◎	◎
鶴見区	ぼやあ樹 江ヶ崎町	◎	◎	◎
中区	ぼやあ樹 関内	◎	◎	◎

- ◎ 空きあり
- △ 曜日等 要相談
- × 満員(空き待ち)

当社ホームページやSNSでも随時更新しています。QRコードよりぜひご覧ください。



## ぼやあ樹からのお知らせ

当社独自の**要介護4・5および週4日以上泊まりの方を限定**とした【お泊り料金割引キャンペーン】

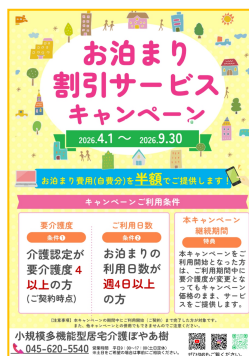
を実施します！！

2026年4月～9月にご利用開始となった方に限り、**宿泊費を特別割引価格**でご案内いたします。

《ご利用条件》 ※①②いずれも該当

- ①要介護4または5の方
- ②週4日以上泊まり利用の方

介護サービスに困っている方や当キャンペーンにつきましてご不明な点等がございましたら、遠慮なく相談窓口までお問い合わせください。



同封の資料をぜひご覧ください！

**相談窓口☎:045-620-5540**

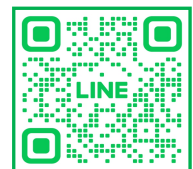


## LINE

### 公式アカウント

友だち登録募集中

LINEアプリの「友だち追加」→「QRコード」から下記のQRコードを撮影して、ご登録お願いします☆



## 「希望をカタチに」 — Vol.4 —

代表取締役 石川 洋一



本コラムでは、「希望をカタチに」という理念が、  
どのような出会いや想いから生まれてきたのかをお伝えしていきます。

看取りの現場で出会う人生は——  
必ずしも長い時間を生きた人ばかりではありません。  
あるご家族との出会いは、「人生の終わりをどう  
受け止めるのか」という問いを私に静かに残しました。  
その方は、社会的にも成功している男性でした。  
仕事で大きな責任を担い、多くの人から信頼され、  
家庭も築いていました。  
美しく聡明な奥さんがいて、そして一人息子がいました。  
誰が見ても順調で満たされた人生に見えていたと思っ  
ます。  
息子さんは勉強がよくでき、難関といわれる大学への  
進学が決まっていた。  
これから大きく世界を広げていく、  
まさに人生の入り口に立っている時期でした。  
父親にとっても誇らしい出来事だったに違いありません。  
しかしその頃、彼の体に異変が見つかりました。  
検査の結果、告げられたのは進行した癌でした。  
治療は続けられましたが、医師から伝えられたのは  
「残された時間は限られている」という現実でした。  
入院という選択肢もありました。  
けれど彼が選んだのは、自宅で過ごす時間でした。  
住み慣れた家で、家族とともに過ごしたい。その思いが  
強かったのだと思います。

自宅での看取りが始まり、生活の時間は少しずつ  
変わっていきました。  
それまで仕事中心だった日々は、静かな時間へと  
移っていきました。  
奥さんは、変わらず彼のそばにいました。  
体調を気遣い、食事を整え、多くを語らず寄り添い  
続けていました。  
長い年月を共に歩んできた夫婦でした。  
けれど、死を前にした時間は  
決して穏やかな感情だけではありません。  
ある日、彼はぽつりとこう言いました。  
「全部手に入れたと思っていたんだけどな」  
仕事も、家庭も、守りたいものも。  
それでも、そのすべてを残したまま自分だけが先に去る  
現実を簡単には受け入れられなかったのだと思います。

特に、息子さんとの関係にはどこか距離がありました。  
父親と同じように努力し、結果を出してきた人でした。  
誇らしいはずなのに、  
二人の会話にはどこかぎこちなさがありました。  
期待。尊敬。そして、わずかな緊張。  
親子という関係は、近いからこそ素直になれないことも  
あります。  
息子さんは忙しい学生生活の中で、時間を作って父親のそ  
ばに来ていました。  
けれど、何を話しているのか分からない。  
そんな沈黙の時間が流れることもありました。

帰り際、息子さんが「また来るよ」と言うと、  
彼は少しだけ笑って「無理するな。勉強、大事だからな」  
そう答えました。  
本当は、もっと伝えたいことがあったのかもしれませんが。  
誇りに思っていること。これからの人生への願い。  
けれど父親として、弱っていく姿を見せることに  
ためらいもあったのだと思います。  
奥さんは、そんな二人を静かに見守っていました。  
夫を愛している。息子も愛している。  
だからこそ、二人の距離を感じる瞬間が胸に残ることも  
あったのだと思います。

人は死を前にするとすべてを整理できるわけでは  
ありません。  
受け入れたい。でも受け入れきれない。  
伝えたい言葉がある。でも言葉にならない。  
そんな思いを抱えながら、  
時間は静かに流れていきます。  
ある日、奥さんが彼の手をそっと握っていました。  
静かな部屋の中で、  
二人の間には言葉のない時間が流れていました。  
そのとき彼が何を思っていたのか。  
本当のところは、誰にも分かりません。  
これまでの人生のこと。奥さんと歩いてきた時間のこと。  
そして、これから歩んでいく息子の人生のこと。  
もしかしたら、そんなことを静かに思い浮かべていたの  
かもしれません。  
そしてもし、その気持ちを言葉にするとしたなら——  
「悪くない人生だった」  
そんな思いだったのかもしれない。

後悔も、未練も、きっと残っていたと思います。  
それでも家族と過ごしてきた時間は確かにそこにあった。

看取りの現場で感じるのは、  
**人生は決してきれいに整理されるものではありません。**  
言えなかった言葉。残る思い。消えない葛藤。  
それでも人は、そのすべてを抱えたまま人生を終えて  
いきます。  
そして残された家族は、その時間をそれぞれの形で  
受け止めていきます。  
ぼやあ樹が掲げている「希望をカタチに」という言葉。  
それは、奇跡を起こすことではありません。  
その人が生きてきた人生と、家族の時間を大切に守り  
ながら、人生の最後の時間をその人らしく過ごせるよう  
支えること。  
その静かな時間の中にも、確かに希望はあるのだと  
私たちは信じています。  
これからも、その人と家族の人生に寄り添いながら、  
人生の最後の時間をそっと支えていきたいと思っ  
ています。

次回もまた、新たな「希望をカタチに」の物語をお届けいたします。